

「気のいい火山弾」論

A Study of *Lively Volcanic Bullet*

高橋直美
TAKAHASHI Naomi

要旨

童話「気のいい火山弾」は宮沢賢治が法華文学を志した初期の作品である。この作品の主人公であるベゴ石の特徴を多面的に考察するには、当時の賢治が日蓮の説く『法華経』の文底秘沈である「事の一念三千」（賢治は作品や書簡でこの「事の一念三千」を「妙法蓮華経」と記しているため、以下では「妙法蓮華経」と記し、経典である『法華経』と区別する）をいかに感得したのかとともに、賢治の仏教に対する見識の広さや科学に対する見方も知る必要がある。

火山弾であるベゴ石は火山の産物であり、永遠の生命を象徴する「石」である。その性格のよさは仏教の修行者の姿勢として重要なものであり、また火山信仰の対象である岩手山や、花巻・盛岡の巨石の文化等からも、ベゴ石の重要性を推察することができる。

一方で、ベゴ石は悪口罵詈されることを修行としている点から「クニサレモセズ」を理想とするデクノボーとは異なり、また、化他行である折伏行を行じていない点から、悪口罵詈・杖木瓦石の難を被りながらなお『法華経』を説いた常不軽菩薩とも異なっている。

ベゴ石の「みなさん。ながながお世話でした。苔さん。さよなら。さっきの歌を、あとで一ぺんでも、うたって下さい」というわかれのことは、「393 昭和6年9月21日 宮沢政次郎・イチあて書簡」に記された「どうかご信仰といふのではなくてもお題目で私をお呼びください」に近い「摂受」と考えられる。また、日蓮は「攝受・折伏時によるべし」（「佐渡御書」）と説いているが、賢治も「撰折御文 僧俗御判」に「佐渡御書」の同文をのせ、「開目抄」の「無智悪人ノ国土ニ充滿ノ時ハ摂受ヲ前トス。安樂行品ノ如シ。邪智謗法ノ者多キ時ハ折伏ヲ前キトス。常不軽品ノ如シ」等を羅列している。

以上のことからベゴ石の言動は、当時の賢治が考えた摂受と折伏の一つの形であるといえよう。

キーワード：火山弾 山岳信仰 牛 日蓮 『法華経』 仏陀 常不軽菩薩 研究室

1. はじめに

「気のいい火山弾」は大正10年秋ごろ執筆されたと推定される童話である。

作品の評価としては、小沢俊郎のようにベゴ石の価値について否定的なもの（「虔十とベゴ石」『四次元』昭和40年）や大塚常樹のようにベゴ石の価値の反転（『宮沢賢治 心象の記号論』平成11年）をみたもの、野々宮紀子のようにベゴ石をデクノボー的な性格をもった覚者（「気のいい火山弾」『国文学 解釈と鑑賞』平成13年）とみたものなどが代表的である一方で、地質学者の宮城一男のように地質学的見地からの読み方を示している（『『気のいい火山弾』—地質学的作品を読む—』『国文学 解釈と鑑賞』平成8年）ものもある。

他の論文等をもみても、ベゴ石をデクノボーや常不軽菩薩とみるものが多いが、これまでいくつかの拙稿で述べたようにデクノボー＝常不軽菩薩ではない。なぜなら、「クニサレモセズ」は常不軽菩薩の行ではありえないからである。しかも、賢治のように真摯な信仰者が常不軽菩薩を「サウイフモノ」や「デクノボー」などと表現すること自体が疑問である。

しかしながら、作品の書かれた時期や内容を考えると、この作品が賢治の法華文学の初期作品であることに間違いはない。

本稿では「気のいい火山弾」に見られる宮沢賢治の仏教観—とくに『法華経』や日蓮の教義—を中心に、ベゴ石と『ブツダのことば（スッタニパータ）』との類似性や岩手の風土・民俗—特に岩手山信仰と石の文化—との関係について考察する。

2. ベゴ石という火山弾

ベゴ石は「稜がなく、丁度卵の両はじを、少しひらたくのばしたような形」で「ななめに二本の石の帯のようなものが、からだを巻いて」いる「大きな黒い」火山弾である。この火山弾は東京帝国大学校の研究者が、

「あ、あった、あった。すてきだ。実にいい標本だね。火山弾の典型だ。こんなととのったのは、はじめて見たぜ。あの帯の、きちんとしてることね。もうこれだけでも今度の旅行は沢山だよ。」
「うん。実によくととのってるね。こんな立派な火山弾は、大英博物館にだってないぜ。」

と賞賛するほど貴重なものである。

現存する火山弾では、「宝永大噴火」の際に境内に飛んできたといわれるきれいな楕円形で重さが約100キロある富士浅間神社の火山弾が貴重なものとされている。小山真人（静岡大学・教育学部・総合科学教室）の「火山学者に聞いてみよう トピック編」にも、直径65mm以上の火山弾は5 km以上飛ぶことはめったにないとあり、富士山本宮浅間大社にある100kgの火山弾のように形が整ってかつ大きなものは珍しいといえる。

火山弾（英：volcanic bomb）とは、爆発噴火に際して溶岩の破片が放出されるときに形成される直径65mm以上ある溶融した岩石の塊で、地面に達する前に冷えて固まったものである。火口から数km先まで飛ぶこともあり、飛行中に「空気力学的に適した形に変形する」こともある。大噴火ではしばしば巨大な火山弾が生まれ、1935年の浅間山噴火では5-6 mのものが火口から600mも飛行した

といわれている。また火山弾はその形状で呼び名が異なり、その形状は火山弾を形成するマグマの流動性に依存している。

本作品の主人公であるベゴ石は「大きな黒い石」とあり、「さっきの四人の学者と、村の人たちと、一台の荷馬車がやって参りました」「みんなは、『よいしょ。よいしょ。』と云ひながら包みを、荷馬車へのせました。」とあることから、数人がかりで持ち上げ、荷馬車で運ぶような大きさと重さであることがわかる。

また、ベゴ石の形状については、以前はベゴという名前から牛糞状火山弾とされていたが、「僕は、生れてまだまっかに燃えて空をのぼるとき、くるくるくるくる、からだがまわったからね」「ベゴ石は、稜がなく、丁度卵の両はじを、少しひらたくのぼしたような形でした。そして、ななめに二本の石の帯のようなものが、からだを巻いてありました」とあることから、飛行中の回転によってねじられ、細長くアーモンド状になった紡錘状火山弾であるというのが今日の通説となっている。

牛糞状火山弾は流動性の高いマグマが適当な高さから落下したときに形成され、牛糞に似た不規則な円盤状に広がる。しかし、ベゴ石は「丁度卵の両はじを、少しひらたくのぼした」ような形で「ななめに二本の石の帯のようなものが、からだを巻いて」いるため、この特徴から典型的な紡錘状火山弾の様相を呈していると考えられるのである。

そして、ベゴ石が貴重な標本になり得るのは、大きいこと、紡錘状火山弾の特徴であるしっかりした美しい帯（＝みぞ）を持っていること、形が整っていることと記されている。

火山弾に関しては、2003年3月12日の『朝日新聞 山口版』に掲載された、

福栄村紫福奥畑の山中で紡錘状の石塊（長さ47センチ、幅30センチ）が見つかり、阿武火山群の一つ、紫雲山（376メートル）の噴火で飛んだ火山弾の可能性が高いことが11日、山口大機器分析センターの永尾隆志・助教授＝火山学＝の調査で分かった。これだけ大きく、きれいな形をした火山弾は同火山群では初めてという。

という記事や、前述の富士山本宮浅間大社の境内に安置されている火山弾の案内板からも、ベゴ石の希少性を知ることができる。

ベゴ石の形状や大きさや色ももちろん大切であるが、特に重要なのは「二本の石の帯のようなもの」である空中での回転方向を示す横方向の「みぞ」である。この「みぞ」は爆発して打ち上げられ、回転しながら飛んできた様子を知る貴重な資料であり、東京帝国大学地質学教室の研究者たちが大喜びした理由でもある。

ところで、化石について賢治は「銀河鉄道の夜」で、

「標本にするんですか」

「いや、証明するに要るんだ。ほくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらい前にできたという証拠もいろいろあがるけれども、ほくらとちがったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水や、がらんとした空か見えやしないかということなのだ。わかったかい。けれども、おいおい、そこもスコップではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋れてるはずじゃないか」

と述べ、化石＝地層の証明としているが、この作品で火山弾は「標本」となる。

化石とは堆積岩の中に生物の遺骸や生活跡が残されたものであり、地質の時代や年代を知ることや

過去の自然環境を知る手がかりになるため、その時期にそこで何があったのかを知ることができる。

一方、火山はそこに暮らす人々にとって常に生命を脅かす自然の脅威であり、噴火による災害は火山の噴出物や火砕流のみならず、気象にまで影響を及ぼし、また地面に積った火山灰が土石流になって人々の生活に甚大な影響を与える。

平成26年9月27日の御嶽山の噴火では、死亡が確認された47人のうち46人（10月3日現在）が噴石による損傷死だったことが、東京大学地震研究所の金子隆之氏（火山地質学）のヘリコプターから撮影した御嶽山の画像の分析によって判明した。山頂付近では直径10cm以上の噴石が時速300km弱のスピードで多数降り注ぎ、火口から約500mの範囲で直径10cm以上とみられる噴石による穴が4m四方当たり平均10個以上、火口から1キロ先でも直径50～60センチの大きさの穴が確認されている（『産経新聞』平成27年10月3日）。

しかしそのような研究や講義は、現地から遠く離れた大学の研究室や専門機関などで行われるため、研究にふさわしい理想的な標本や資料を採取することが必要不可欠となる。東京大学総合研究博物館の宮本英昭准教授は、HPにある「クラッツ標本」の説明で、

地球には多種多様な岩石や鉱物、化石が存在している。博物学が明らかにしたこの重要な事実は、地球という天体の生い立ちや表層環境の歴史、さらにはその上に誕生した生命体の進化を理解する上で、実は本質的に重要である。地球表層の多様性を系統的に理解するには、地球の一部を切り取ることで形成された、典型的かつ多種類の実物標本を手にとって観察することがもっとも早道である。こうした理由から、地質学や鉱物学、古生物学分野では、実物標本が研究・教育上不可欠な存在となっている。

とその重要性を述べている。

ところで、ベゴ石が火山弾であることから、作品執筆とされる大正10年前後の東北の火山について調べて見ると、執筆2年前の大正8年7月15日には岩手山で小規模の水蒸気噴火が起っていることがわかる。噴火場所は西岩手火山大地獄谷で新火口も生成され、火砕物が降下し、噴石が大地獄脇の登山道に飛散して、降灰があったとある（『日本活火山総覧（第4版）』気象庁編、2013）。

成層火山である岩手山で記録されている最古の噴火は貞享3（1686）年の大噴火であり、大正8（1919）年までに4回の噴火があったとされているが、享保17（1732）年の噴火では大量の溶岩が流れて賢治作品にも登場する「焼走り」ができたといわれている。このときは盛岡にも火山灰が降ったが、岩手山ではそれ以降約270年間マグマ噴火は観察されていない。

また大正元（1912）年に理科大学附属観象所（現：東北大学大学院理学研究所地震・噴火予知研究観測センター）が仙台市向山に設置され、地震観測を始めとする気象観測などが開始されたことは、火山の多い東北にとって噴火が身近な問題であることを示している。

東北地方ではないが、大正期には浅間山がその活動を活発化させている。大正9（1920）年12月には連続的な噴石活動があり、噴煙も多量で、14日には噴石のため峰の茶屋焼失、軽石が大量に噴出して、22日には山火事を起こして200ヘクタール以上焼失するという被害が出ている。

浅間山は「気のいい火山弾」執筆とされる大正10（1921）年も噴火活動が活発で、1月18日、6月4日には空振のために山麓では戸障子破損や鳴動、降灰が確認されている（東京大学地震研究所）。

ちなみに、火山の噴火を人々の生活に利用するために自らが犠牲になった「グスコブドリの伝

記」は昭和6（1931）年ごろ成立した「グスコンブドリの伝記」に加筆、改稿して翌年3月までに発表したとも、大正15（1926）年ごろ執筆されたとも言われている（渡辺芳紀『宮沢賢治大事典』平成19年）が、仮に大正15年であれば、「気のいい火山弾」と年代的に近い創作動機があったといえるだろう。

一方、本作品が書かれたとされる大正10年前後の賢治自身の行動を見ると、大正9年11月に国柱会信行部に入会、翌10年1月23日に家出上京して鶯谷にあった国柱会館で高知尾智耀に会い、本郷菊坂町に下宿し、文信社で校正・筆耕の仕事しながら国柱会の街頭布教や奉仕活動をしていたが、妹・トシの病のため夏に帰花している。国柱会の本部で高知尾智耀と面会した賢治は、文芸による大乘仏教の普及を勧められ、「雨ニモマケズ手帳」に「高知尾師ノ奨メニヨリ／法華文学ノ創作／名ヲアラハサズ、／報ヲウケズ、／貢高ノ心ヲ離レ」と記していることから、賢治がその後意識的に法華文学を創作しようとしていたことが推測される。

次に、「気のいい火山弾」に当時の賢治の仏教思想がどのように反映されているのかを考察する。

3. ベゴ石の徳

まず、なぜこの火山弾がベゴ石と命名されたのかを考えてみる。

ベゴ石は火山から飛ばされてきた黒色の大きな火山弾であり、丸みを帯びた大きな黒い石の形状が牛の寝そべった姿に似ているからである。

ところで、賢治作品に登場する黒い火山弾では、「狼森と笹森、盗人」の語り部である黒坂森の大きな巖が有名であるが、この巖は、

ずうつと昔、岩手山が、何べんも噴火しました。その灰でそこらはすつかり埋まりました。このまつ黒な巨きな巖も、やつぱり山からはね飛ばされて、今のところに落ちて来たのださうです。噴火がやつとしづまると、野原や丘には、穂のある草や穂のない草が、南の方からだんだん生えて、たうとうそこらいつぱいになり、それから柏や松も生え出し、しまひに、いまの四つの森ができました

と記され、岩手山麓の歴史を語る生き証人として、森に君臨する。しかも、賢治は上記のように岩手山の噴火から森の形成までを描写することで、物語の舞台を科学的に示唆している。吉見正信が『「狼森と笹森、盗人」一作品起源への一考察』（1996年『国文学解釈と鑑賞 61』）で述べているように、「そうした風景形成・自然生成という大きな時間を生きた者でなくしては、それを語る資格者とは云え」ないからであろう。

ベゴ石も自身の成立について、

「僕は、生れてまだまっかに燃えて空をのぼるとき、くるくるくるくる、からだをまはったからね。」

「ははあ、僕たちは、空へのぼるときも、のぼる位のぼって、一寸とまった時も、それから落ちて来るときも、いつも、じっとしてゐたのに、お前さんだけは、なぜそんなに、くるくるまはったらうね。」

その癖、こいつらは、噴火で碎けて、まっくろな煙と一緒に、空へのぼった時は、みんな気絶し

てゐたのです。

と述べ、火山弾の成立過程を科学的に説明している。

ベゴ石の性格は素直で柔和である。稜のあるあまり大きくない黒い石たちにからかわれても、「ありがとう」のことばとともに素直に応じる。『法華経』の「如来寿量品第十六」には法華経の行者は「質直意柔軟／一心欲見仏／不自惜身命」が重要であると説かれているが、ベゴ石はまさにこれらの資質をそなえていると言えよう。

昭和4（1929）年の書簡〔252c〕（日付不明 高瀬露あて 下書）に、「いまに〔数字分空白〕科学がわれわれの信仰に届いて来ます」とあるが、賢治は科学とは正しい信仰を証明するものであるとし、日蓮が説いた『法華経』の文底秘沈である「事の一念三千」（下記の作品にある「妙法蓮華経」）を万物の法の根源であると考えていた。

「(一九二九年二月)」にも、
われとは畢竟法則の外の何でもない
からだは骨や血や肉や
それらは結局さまざまの分子で
幾十種かの原子の結合
原子は結局真空の一体
外界もまたしかり
われわが身と外界とをしかく感じ
これらの物質諸種に働く
その法則をわれと云ふ
われ死して真空に帰するや
ふたゝびわれと感ずるや
ともにそこにあるのは一の法則のみ
その本原の法の名を妙法蓮華経と名づくといへり

と記しており、万物の諸々の法の当体は上記「妙法蓮華経」＝日蓮が説いた『法華経』の文底秘沈である「事の一念三千」であると述べている。ベゴ石も当然この「妙法蓮華経」の当体であり、ベゴ石を取り巻く自然も「妙法蓮華経」の当体となる。

また「〔195〕（1921年7月13日）關徳彌あて封書」に、

おゝ。妙法蓮華経のあるが如くに絵てをあらしめよ。私には私の望みや願ひがどんなものやらわからない。（中略）これからの宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です。

と記し、自然のままに典型的な紡錘状火山弾となったベゴ石は、まさに「(一九二九年二月)」にある「本原の法である妙法蓮華経」のあるがままの姿で、しかも絵画的な描写の多いこの作品で自然の創作した偉大な芸術となっているのである。

ベゴ石が素直で哲学的・求道的であることは、その生き様からも理解できる。霧が晴れて日差しがさして晴れ渡ると、稜のある石どもは雨や雪のことを食べ物に絡めて考え、勝手な妄想に浸るのに対し、ベゴ石は太陽と青空を静かに見上げ、柏の葉のきらめきを眺める。また、ベゴ石の、

お空。お空。お空のちゝは、

つめたい雨の ザァザザザ、
 かしはのしづくトンテントン、
 まっしろきりのポッシェン。
 お空。お空。お空のひかり、
 おてんとさまは、カンカンカン、
 月のあかりは、ツンツンツン、
 ほしのひかりの、ピッカリコ。

という歌は、天地のありのままを賛美し、自然＝真の芸術＝宗教を表している。これは森羅万象に「妙法蓮華経」を感じた賢治が、ベゴ石に歌わせた自然賛歌＝「妙法蓮華経」賛歌だと考えられる。

賢治が帰依した日蓮宗の宗祖・日蓮は「諸法實相鈔」に、

問云、法華経第一方便品云。諸法實相乃至本末究竟等云云。此経文の意如何。答云、下地獄より上佛界までの十界の依正の當躰、悉一法ものこさず妙法蓮華経のすがたなりと云経文也。依報あるならば必正報住すべし、釈云、依報正報常宣妙経等云云。又云、實相必諸法、諸法必十如、十如必十界、十界必身土云云。(中略) 實相と云は妙法蓮華経の異名也。諸法妙法蓮華経と云事も。地獄は地獄のすがたを見せたるが實の相也。餓鬼と變ぜば地獄の實のすがたには非ず。佛は佛のすがた。凡夫は凡夫のすがた、萬法當躰のすがたが妙法蓮華経の當躰也と云事を諸法實相とは申也。

と記し、諸法実相＝「妙法蓮華経」であると説いている。

ベゴ石が「稜がなく、丁度卵の両はじを、少しひらたくのぼしたやうな形」で「ななめに二本の石の帯のやうなものが、からだを巻いて」いるのは、噴火で飛ばされた状況そのままであり、その体形さえも自然の法則に従順で、「質直意柔軟」(『法華経』「如来寿量品第十六」)＝心根の良さ＝形の良さ(諸法実相)を表している。ベゴ石の生成はまさにその性情のよさが諸法実相として表出されたといえよう。

その一方で、火山弾＝岩石であるベゴ石は『法華経』の「如来寿量品第十六」の肝心である永遠の生命の象徴(久遠実成)とも考えられる。古来より岩石は永遠の生命の象徴とされてきた。

『古事記』には山の神・大山津見神には石長比売と木花之佐久夜毘売という娘がおり、天孫降臨の瓊瓊杵尊の妻として両者を差し出したが、尊は美しい木花之佐久夜毘売のみ娶り醜い石長比売を返したため、磐のような長寿を拒んだとして天孫はその寿命が短くなる。野原の草木は華麗ではあるが短命を免れられず、醜い石のみが長い年月を過ごすことになることと記されている。

また、特に何かの役に立つわけでもなく、その場から動くことさえできないベゴ石にとって、空高く燦然と輝き、すべてのものに平等に恵みをもたらす太陽は信仰の対象にすらなる存在である。これは太陽と同様、地上を照らす月に対して詠んだ「月天讚歌(擬古調)」に「いまは怨親平等の／ひかりを野にぞながしたまへり」とあることから理解でき、それは「妙法蓮華経」の功德により仏国土建設を目指す賢治との関係に似ている。ゆえにベゴ石は太陽と一緒に割られる(殉教する)ならばそれはそれで構わないと考える。なぜなら、「妙法蓮華経」＝自然の法則をありのままに受け入れることがベゴ石の生き方＝修行だからである。

しかしながら、ベゴ石は東京帝国大学校(正しくは東京帝国大学であり、東京帝国大学校は存在し

ない)の研究者により、研究室の標本となる。果たしてそれはベゴ石にとって幸福なことなのだろうか。東京帝国大学は当時の日本にあって最高権威学府であるが、そこでは窮屈な密閉空間に閉じこめられ、自然と交感することができなくなる。詩「春と修羅」に「修羅は樹林に交響し」とあるように、賢治にとって「妙法蓮華経」の法体である自然との交感は必要不可欠なものであった。太陽を崇敬し、自然と交感するベゴ石も賢治と同様であろう。自己犠牲の上に皆の幸福があれば運命に従うが、薄暗い研究室に置かれることよりも太陽の下で野原にいるほうがベゴ石にとっては幸せなことである。

ゆえにベゴ石は「私の行くところは、こゝのやうに明るい楽しいところではありません。けれども、私共は、みんな、自分でできることをしなければなりません」と皆に別れを告げ、「苔さん。さよなら。さっきの歌を、あとで一ぺんでも、うたって下さい」と言って、修行を強要するのではなく万物の真理である「妙法蓮華経」の歌を歌うよう促したのである。このようなベゴ石の思いは「393 昭和6年9月21日 宮沢政次郎・イチあて書簡」に「どうかご信仰といふのではなくてもお題目で私をお呼びください」に近いものであると推測できる。

4. ベゴという名前—『ブッダのこぼ』から

ベゴ石はその形状から牛が寝そべっている姿を連想させるが、その形状のみならず周囲に存在する稜のあるあまり大きくない黒い石や植物たちとのやり取りからうかがえるベゴ石ののんびりとした性格もまた、牛ののんびり感を醸しだしているが、ベゴ石が万物の真理を求め、永遠の生命を持っているという仏教的な観点から考えると、ベゴ=牛はまた違った意味を持つてくる。

仏教の開祖である釈尊は本名ゴータマ・シッダールタといい、ゴータマ (Gautama) は「至高の牛」、シッダールタ (Siddhartha) は「目的を達成したもの」の意である。

また『ブッダのこぼ (スッタニパータ)』(中村元 訳 岩波文庫)には、「646 牡牛のように雄々しく、気高く、英雄・大仙人・勝利者・欲望のない人・沐浴した者・覚った人〈ブッダ〉、一かれをわたくしは〈バラモン〉と呼ぶ。」とあるように、牛の比喩が多く使用されている。

中村元は『ブッダのこぼ (スッタニパータ)』の解説で、

発展する以前の簡単素朴な、最初期の仏教が示されている。そこには後代の煩瑣な教理は少しも述べられていない。ブッダ (釈尊) はこのような単純ですなおな形で、人として歩むべき道を読いたのである。かれには、みずから特殊な宗教の開祖となるという意識はなかった。修行者たちも樹下石上に座し、洞窟に瞑想する簡素な生活を楽しんでいたもので、大規模な僧院 (精舎) の生活はまだ始まっていなかった。

と述べており、野の哲学者であるベゴ石の野原での暮らしは、簡素で素直な悠々自適の生活を送るといふ点において、釈迦やその弟子たちの生活とも共通している。

この『ブッダのこぼ (スッタニパータ)』ではまた、牛と同様に「犀の角」がキーワードとなっている。中村の「註釈」によると、「(21) 犀の角——原文には khaggavisana とあるが、原語についてみると、khagga (=Skt・khaadga) は、一、刀、犀 (rhinoceros) という意味で、visana は角であるから、両者を合すると、「犀の角」となる。」とあり、犀の角が一つしかないように、求道者は、他の人々からの毀誉褒貶にわずらわされることなく、ただ独りでも、自分の信念にしたがって暮らす

こと、すなわち、「独り歩む修行者」「独りさとった人」(paccekabuddha)の心境や生活を述べているのである。日本には犀はいないが、その比喩が表す愚直に一人生きる姿はベゴ石を彷彿とさせる。

『ブッダのことば(スッタニパータ)』には、犀の角に関するものとして、

42 四方のどこにでも赴き

害心あることなく

何でも得たもので満足し

諸々の苦難に堪えて

恐れることなく

犀の角のようにただ独り歩め

56 貪ることなく、詐ることなく、渴望することなく、(見せかけで)覆うことなく、濁りと迷妄とを除き去り、全世界において妄執のないものとなって、犀の角のようにただ独り歩め

68 最高の目的を達成するために努力策励し

こころが怯むことなく

行いに怠ることなく

堅固な活動をなし

体力と智力とを具え

犀の角のようにただ独り歩め

等が記されているが、42は周囲の稜のある黒い小さな石や植物たちにいじめられながらも自然と交感するベゴ石の姿と、56・68は大自然の中で空や風や太陽に真理を求め、森羅万象=万物の法=「妙法蓮華経」とともに過ごすベゴ石の生き様とよく似ている。

ベゴ石は噴火で飛ばされた場所から動くことはできないが、東京帝国大学校地質学教室に運ばれる際には、「私の行くところは、こゝのやうに明るい楽しいところではありません。けれども、私共は、みんな、自分でできることをしなければなりません。」として42にあるようなどこに行っても「ただ独り歩」む決意をする。

大正11年頃までに初稿ができたとされる「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」にも、ペンネンネンネン・ネネムの偉大さに火山の爆発の予知、そして、噴火物の直撃を避ける威徳を挙げている。火山の噴火は生命に対する直接的な危険のみならず、人々の生活、特に農業に多大な被害・影響を与える。賢治の恩師であり、盛岡高等農林学校で土壌学を教えていた関豊太郎は、黒ボク土の研究の嚆矢として有名である。『グスコブドリの伝記』に登場するクーボー大博士は、恩師の関豊太郎教授がモデルといわれるが、関豊太郎は黒ボク土研究の草分けとして、日本における土壌肥科学の発展に大きく貢献している。黒ボク土は火山灰と腐植で構成され、施肥が必要不可欠であり、東北などに広がる痩せた土地をいかに豊かにするかは賢治の課題でもあった。ベゴ石は『ブッダのことば』の68にある「最高の目的を達成するために努力策励」すべく研究室の標本となり、人類の幸福に貢献する。そこがたとえ「こゝのやうに明るい楽しいところ」ではなくとも、「私共は、みんな、自分でできることをしなければならぬ」。怯むことなく、しっかりと自分の使命を全うし、犀の角のようにただ独り歩むこと、これがベゴ石の修行なのである。

5. ベゴ石とデクノボーと不軽菩薩

ところで、野々宮紀子をはじめとする従来の説には「気のいい火山弾」と「雨ニモマケズ」のデクノボーを重ねるものが少なからず存在する。たしかに、「決シテ瞋ラズ／イツモシヅカニワラッテキル」姿は「非常に、たちがよくて、一ぺんも怒ったことがなく、周囲のものにいじめられてもかならず「ありがたう」といい、いじめられたにもかかわらず丁寧に正論を述べ、しかも相手がそれにおびえると反対に驚いてなぐさめるベゴ石の姿と重なる。

しかしながら、「雨ニモマケズ」のデクノボーは賢治の「サウイフモノニ／ワタシハナリタイ」ものとして「ホメラレモセズ／クニモサレズ」とあるのに対し、賢治の信奉する『法華経』の「法師品第十」では末法では法華経の行者に対して不信のものが皆「猶怨嫉多／況滅度後」であると、また「常不軽菩薩品第二十」では「四衆之中／有生瞋恚／心不浄者／悪口罵詈言」「杖木瓦石／而打擲之」として法華経の行者は必ず難にあうと説かれている。

賢治の崇敬する常不軽菩薩は「我深敬汝等／不取軽慢／所以者何／汝等皆行菩薩道／当得作仏」という「二十四文字の法華経」を唱え、四衆に軽蔑され、杖木瓦石の迫害を加えられても屈することなく礼拝行を全うし、その功德により成仏する。末法悪世に『法華経』を弘教する常不軽菩薩が「悪口罵詈・杖木瓦石」の難を受けることは、「勸持品第十三」にも説かれている。常不軽菩薩のように法華経の行者は難にあうと経文にあるため、「クニサレ」たくなくと祈るデクノボーは常不軽菩薩あるいはその眷属とはいえないのである。

一方、ベゴ石は「杖木瓦石／而打擲之」こそされないものの、周囲から「悪口罵詈」「怨嫉」の難を受けている。しかも、その難に動じないのみならず増上慢である迫害者自身のことを心配する。「ホメラレモセズ／クニモサレズ」とあるデクノボーに比べると、常不軽菩薩に近い存在である。

増上慢とは「勸持品第十三」に「有諸無智人／悪口罵詈等／及加刀杖者」とある俗衆のことで、法華経の行者はこのような難に対し「我等皆当忍」の行を行う。

『ブツダのこば』に、ブツダになるためには「647 前世の生涯を知り、また天上と地獄とを見、生存を減し尽くしに至り、名前や生まれではなく「行為」が大切であると述べられているとおり、仏教は「修行」が大切である。

マグマの中から野原に飛ばされ、増上慢である周囲のものに悪口罵詈されながらも自然のままに生きるベゴ石が本来の「立派な、本たうの名前」に無頓着なのは、まさに上記の「行為によってパラモン」だからである。

この物語の最後でベゴ石は、大自然の中から暗く冷たい人工の研究室へ移管されることになる。自然の循環の中であるがままに生きてきたベゴ石にとって、研究室は無機質な牢獄のようなものである。しかし火山の爆発は人命のみならず多くの生物の命を奪い、自然を破壊する。草木成仏を信じる賢治にとって、すべての生命や自然を守ることにつながる「火山噴火への対処」は必要不可欠なものであり、ベゴ石も「自分でできることをしなければならぬ」と決意し、「我不愛身命／但惜無上道」を行じるために研究室に運ばれる。

仏教に常楽我浄という言葉がある。これは仏の境地に具わる四徳のことで、四徳波羅蜜ともいう。常とは常住不変で、時間や空間を超越した有為転変することのない常德を具えていることをいい、楽

とは生死の苦しみから脱した安楽の境地をいう。我とはあらゆる妄執や世間の小我妄執を離れた自由自在の真の大我をいい、浄とは世間の種々の煩惱や悪業・悪事による穢れがなく清浄であることをいう。

ベゴ石は石であるからその姿は常住不変だが、野原の草木は「それから何べんも、雪がふったり、草が生えたりしました。かしはは、何べんも古い葉を落して、新しい葉をつけました」とあるように、生育や枯死など生死の変化を続ける。

ベゴ石に生えた苔はベゴ石があつてこそ生活が保証されるにもかかわらず、蚊の悪口を聞き本来の立場を忘れてベゴ石を侮り、

ベゴ黒助、ベゴ黒助、
黒助どんどん、
千年たつても、黒助どんどん、
万年たつても、黒助どんどん。

と歌い、馬鹿にする。

しかし、上記の歌はベゴ石を侮るどころか、実はベゴ石の不変性を示しているのである。そして、苔は最終的にはベゴ石の対極として人間にとって無価値であることを知らされ、むしられてしまう。そして、自らが「慢」であったことに気付かされるのである。

「慢」について、賢治は「[488] 1933年9月11日 柳原昌悦あて 封書」に、

私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過って身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだについたものででもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しみ、同輩を嘲り、いまどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想のみ生活して却って完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かゞ空しく過ぎて漸く自分の築いてゐた蜃気楼の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従つて師友を失ひ憂悶病を得るといったやうな順序です。

と述べ、「慢」を戒めている。

『法華経』の「常不軽菩薩品第二十」には、

四衆之中。有生瞋恚。心不浄者。悪口罵詈言。是無知比丘。(中略)衆人或以。杖木瓦石。而打擲之。避走遠住。猶高声唱言。我不敢軽於汝等。汝等皆当作仏。以其常作是語故。増上慢。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷。号之為常不軽。

と説かれているが、稜のある石どもやをみなへしや苔などは皆上記の「増上慢」(俗衆増上慢)であり、その「貪・瞋・癡」でベゴ石に辛くあたる。

しかし、ベゴ石はかれらに「ベゴさん。今日は。おなかの痛いのは、なほったかい。」とからかわれながらも、「ありがたう。僕は、おなか痛くなかったよ。」と温和に対応する。

日蓮は『松野殿御返事』に、

有人分此云、先列悪因、次列悪果。悪因十四。一憍慢・二懈怠・三計我・四浅識・五著欲・六不解・七不信・八攀躑・九疑惑・十誹謗・十一軽善・十二憎善・十三嫉善・十四恨善也。

と述べ、十四誹謗を厳しく誡めている。この十四誹謗は前出の常不軽菩薩にも通じるものである。苔

や稜のある石どもやをみなへしはベゴ石を見かけで馬鹿にしたつもりが、実はベゴ石にある仏の永遠の命をも馬鹿にしてしまったのである。それゆえ、吾は東京帝国大学の教官たちにむしりとられてしまい、稜のある石どもは黙ってしまう。

しかし、このようなベゴ石でも実は常不軽菩薩の行を行じてはいない。たしかに「非常に、たちがよくて、一ぺんも怒ったことがなく、「霧が晴れて、お日様の光がきん色に射し、青ぞらがいっぱいにあらはれ」た時にも、稜のある石どものように雨のお酒や雪の団子を考えずに「しづかに、まんまる大将の、お日さまと青ぞらとを見あげ」ることで真理を見つめ、日々精進行を行じてはいるが、精進行とはあくまでも自行であり、『法華経』の説く化他行を行じているわけではない。

自行化他とは大乘の菩薩の初発心時の誓願を示すもので、賢治の大誓願でもある「上求菩提・下化衆生」と言い換えることができる。しかしながら『法華経』は常不軽菩薩の行を大事とし、日蓮は化他行である折伏行を末法の大事としているのに対し、相手の過ちを改めないベゴ石は下化衆生＝化他行をしていないため、常不軽菩薩の行をしていることにはならないのである。

しかしながら、デクノボーとベゴ石の大きな違いは、デクノボーが周囲の判断で自分の気持が動揺することを警戒しているのに対し、ベゴ石は素直に東京帝国大学校の教官に賞賛され、また東京帝国大学校に保管されることにも気持ちはゆるがず、全てを修行と考えていることである。ベゴ石はほんとうの自分を知らないのではなく単に知る必要を感じないだけであり、どのような境遇にあらうと自分が自分であることを悟っているのである。デクノボーが生身の弱い人間であるのと反対に、ベゴ石はどこまでも哲学的である。

この時期、賢治は信仰や自分自身の将来などの問題に苦悩し、また周囲の幸福を願って積極的に信仰を勧めていたが、それに応じる人は妹のトシ以外には見つからなかったばかりか、相手との間に亀裂を生じさせてしまう。

しかしその一方で、上記「柳原昌悦あて封書」に記されているように賢治自身が「いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやう」に思っていた可能性もある。否、可能性を感じたからこそ家出・上京し、国柱会の手伝いをしながら東京で生活をしようとしたと考えられ、その「社会の高みへ引き上げ」られる象徴として東京帝国大学校の研究室行となる貴重な標本という発想がでてきたのかも知れない。

以上のことから、周囲から変人扱いされながらも法華経の行者としてこれから世間に挑もうとした賢治が、自らを鼓舞し、前途の困難にも動じず「上求菩提・下化衆生」を求める姿をベゴ石に託したものとも読み取ることができよう。ベゴ石が周囲の無理解をものともせず犀の角のように愚直に悟りを求め、「我不愛身命 但惜無上道」の決意を込めて新たな道を進む姿を描いた作品がこの「気のいい火山弾」であり、賢治の法華文学の初期作品であるといえる。

6. 蝦夷の巨石文化と賢治

宮沢賢治の故郷である岩手県花巻市・盛岡市近辺には巨石が多々見られ、それらの多くにはいわれや由緒が残っている。賢治が学生時代を過ごした盛岡市内には岩手の由来でもある三ツ石神社の「鬼の手形石」がある。この三つの巨石は岩手山が噴火したときに飛んできたといわれ、三ツ石様として

信仰を集めている。また、同市内には岩手公園の烏帽子岩、盛岡地方裁判所の石割桜、盛岡天満宮の石割梅などの観光名所のみならず、盛岡城址の石垣にも多くの巨石を見ることができる。

一方、賢治の生家がある花巻市は、東和町の丹内山神社に蝦夷の神として有名なアラハバキ大神の巨石（胎内石）や蝙蝠岩や呼石大明神の大岩があり、遠野には続石や羽黒石、巖龍神社の不動岩などがある。まさに石が東北の歴史や文化、信仰に密着している地域なのである。

民俗学者・谷川健一は『白鳥伝説』でアラハバキについて、

その神の実体は蝦夷の神であった。（中略）かつて村国が分断され、孤立していた時代には境の神はきわめて重要な役割をもっていた。しかし、アラハバキはたんなる境の神ではない。それは先住民族の面影をやどす異族の神である。アラハバキももともと名前をもたない蝦夷の神であったのが、やがて門客人神として体裁をととのえられ、大和朝廷の神社の中に摂社または末社として組み入れられていったのである。

と述べ、アラハバキが古代東北の神であったとしているが、胎内山神社のアラハバキ大神の巨石（胎内石）の説明にも、千数百年前より坂上田村麻呂や地元の豪族に崇拜されていた由緒ある神であると記されている。

賢治は少年時代、「石こ賢さん」と呼ばれたほど岩石収集に熱中していた。多くの作品に岩石が登場するが、「気のいい火山弾」のベゴ石、「茨海小学校」で農学校の教師である「私」が採取して茨海狐小学校に寄付した「はじが少し潰つぶれて」いた背囊に入るくらいの火山弾、「狼森と笹森、盗森」で岩手山の爆発で飛ばされた黒坂森の「まっ黒な巨きな巖」などの火山弾は、童話の中で人間界と異界との接点を務めるなどの重要な役割を務めていることに注目したい。

『日本の神々 神社と聖地』（谷川健一 白水社 2007年）の「岩手山神社」の項には、

このように岩手山は活動性を有する火山で、折にふれて猛威を振るう荒ぶる神の山であった。（中略）人々は山形を変じさせる噴火現象から神霊の造物主的な霊力を感じ、そこに神体山として崇敬する信仰が生じたのである。岩手山の信仰は火山を霊山とする原始山岳信仰の一タイプを示している。

とあるが、賢治童話に登場する火山弾が特殊な立場であるのも、このような信仰が影響しているとも考えられる。岩手山は古来信仰の山として有名な活火山である。『岩手山の石造文化財』には「岩手山には東、北、南の三方に登山道があり、それぞれの登山口には岩手山神社がある。即ち、滝沢村柳沢（柳沢口）、西根町平笠（平笠口、上坊口）、雫石町長山（雫石口）の岩手山神社がそれで、藩政時代には新山堂とよばれ、頂の奥宮に対する里宮であり、それより神域とされていた。」と記され、盛岡市内と滝沢市内には現在でも遥拝所が存在するほど崇敬されている。

岩手山にかぎらず、東北は火山の多い土地である。賢治の聖なる地（der heilige Punkt「小岩井農場パート九」）である小岩井農場も火山灰地であり、東北の人々はこのような土地を改良しながら農業を営んできた。そしてそのような土地に生き、農民の生活を憂慮し、自然と信仰を考えた賢治だからこそ、火山の噴火に強い関心を持ったのではないだろうか。

火山弾を主人公にしたこの作品には、東北の歴史や土地柄、山岳信仰や石の文化等、賢治の法華経信仰のみならず、東北の古い文化への憧憬をも垣間見ることができる。

7. まとめ

日蓮は「草木成佛口決」で、

口決云、草にも木にも成る佛也云云。此意は草木にも成り給へる壽量品の釋尊也。(中略) 此有情非情、十如是因果の二法を具足せり。衆生世間・五陰世間・國土世間、此三世間有情非情也。と述べている。ベゴ石のみならず、ベゴ石をいじめた草木など全てのものが仏になる種子を有しているため、ベゴ石は自分を馬鹿にしたものに対しても軽んじることがなかった。そして、このような修行は賢治が法華經の行者の姿である常不輕菩薩の「不輕」を意識していたからといえよう。

この作品は、岩手の地域性や山岳信仰と、『法華經』の「方便品第二」に説かれた「諸法実相」や「如来壽量品第十六」に説かれた「久遠実成」を織り交ぜながら、常不輕菩薩への悪口罵詈をベゴ石へのいじめに見立て、当時の信仰に対する姿勢を述べた賢治の法華文学であるといえる。

また、日蓮は「攝受・折伏時によるべし」(「佐渡御書」)と説いているが、賢治も大正9年夏ごろに編纂されたとされる「撰折御文 僧俗御判」に「佐渡御書」の同文をのせ、「開目抄」からも「無智悪人ノ國土ニ充滿ノ時ハ撰受ヲ前トス。安樂行品ノ如シ。邪智謗法ノ者多キ時ハ折伏ヲ前キトス。常不輕品ノ如シ」の部分引用し、修行について考えている。

賢治はまた大正7年「49 大正7年3月14日前後 保阪嘉内あて 封書」に「誠に私共は逃れて静に自己内界の摩訶不思議な作用、又同じく内界の月や林や星や水やを楽しむ事ができたらこんな好い事はありません。これはけれども唯今は行ふべき道ではありません。今は撰受を行わずるときではなく折伏を行わずるときだそうです。けれども慈悲心のない折伏は単に功利心に過ぎません」と記し、「69

大正7年5月19日 保阪嘉内あて 封書」には「撰受を行わずるときならば私は恋してもよいかも知れない。又悪いかもしれない。けれども今は私には悪いのです。今の私は撰受を行わずの事ができません」と記し、撰受・折伏について考えている。大正9年に編んだ「撰折御文 僧俗御判」でも撰受と折、伏について考え、「攝受・折伏時によるべし」ではあるが今は折伏の時であると確認したにもかかわらず、ベゴ石に折伏行をさせていない。

賢治の信仰にはその時々で多くの波があり、ここでは「勇猛精進」の勇猛であり化他行である折伏行を行わず、精進行であり自行である撰受のみをベゴ石に行わせている。

その原因については、宗教をめぐる父との確執や、「大正10年2月18日 保阪嘉内あて 葉書」を最後に保阪に対して折伏や宗教に関する手紙を出していないことから、相手の幸福を考えての行為にもかかわらず、相手に誤解されたまま関係を悪化させ、ついに相手を改宗させられなかった賢治の挫折感があるのではないかと考えられる。

また、「大正10年7月13日 関徳弥あて 封書」に、「私は書いたものを売らうと折角してゐます」「これからの宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です。いくら字を並べても心にないものはてんで音の工合からちがふ。頭が痛くなる。同じ痛くなるにしても無用に痛くなる。教の手紙は調子が変でせう。斯う云ふ調子ですよ。近頃の私は。」とあるように、自らの宗教観を持ちながらも「売る」という目的を考えた際、「折伏」に対する一般的な民衆感情を考慮してのことだったのかもしれない。あるいは、妹・トシの病気で弱気になったとも考えられるが、どちらにしても、「気のいい火山弾」はそれまでの賢治の熱狂的な信仰とは違った、消極的な姿勢が作品に反映されていると言える。

参考文献：

- 『新校本 宮沢賢治全集』 1995年 筑摩書房
原子朗『宮沢賢治語彙辞典』 1999年 東京書籍
渡部芳紀『宮沢賢治大事典』 平成19年 勉誠出版（株）
『真訓両讀 法華経并開結』 平楽寺書店版 2007年 （株）平楽寺書店
『昭和新定 日蓮大聖人御書』 1982年 大石寺
中村元訳『ブツダのことは スッタニパータ』 1990年 岩波書店
宮城一男『宮沢賢治 農民の地質学者』 1996年 築地書館
門屋光昭『鬼と鹿と宮沢賢治』 2000年 集英社
西田良子「気のいい火山弾」 1992年 （株）創元社
宮城一男『宮沢賢治と自然』 1983年 玉川大学出版部
大藤幹夫・萬田務『宮澤賢治 童話への招待—作品と資料—』 1995年 （株）おうふう
西郷竹彦『宮沢賢治「二相のゆらぎ」の世界』 2009年 （株）黎明書房
別役実『イーハトーボゆき軽便鉄道』 1992年 （株）リプロポート
『谷川健一編 日本の神々 神社と聖地12 東北 北海道』 2007年 白水社
谷川健一『白鳥伝説』 2006年 富山房インターナショナル
加藤碩一他編集『地質学ハンドブック』 2001年 （株）朝倉書店
下鶴大輔他編『火山の事典』 2008年 （株）朝倉書店
関口安義「賢治童話を読む②「気のいい火山弾」」 2011年
『論叢児童文学』 季刊代43号2011年春号 くさむら社
牧野立雄「ベゴの秘密—「気のいい火山弾」を読み直す」 2009年
『国文学 解釈と鑑賞 937 宮沢賢治を読み直す』 至文堂
「宮沢賢治の世界シンポジウム 「気のいい火山弾」から何を学ぶか」 1991年
『文芸教育』 NO.1 54 臨時増刊
野々宮紀子『「気のいい火山弾」』 2001年 『国文学解釈と鑑賞』 第66巻8号
啄木・賢治研究会「なぜベゴ石は「実にはいい標本」になったのか—「気のいい火山弾」を巡って—」 2011年『日本文学会学生紀要19号』 盛岡大学日本文学会
吉見正信『「狼森と策森、盗森」—作品起源への一考察』 1996年 『国文学解釈と鑑賞 61』
佐々木啓「『気のいい火山弾』—「ベゴ石」の「顕彰」をめぐる—」 2006年『北見大学論集』 第28巻第2号
小山真人（静岡大学・教育学部・総合科学教室） <http://kazan-g.sakura.ne.jp/J/QA/topic/topic52.html> 最終確認 2015年1月13日12時18分
情報：農業と環境 No.103（2008年11月1日）
独立行政法人農業環境技術研究所
<http://www.niaes.affrc.go.jp/magazine/103/mgz10306.html>（最終確認 2015年1月13日12時16分）
東京大学大学院理学系研究科・理学部ホームページ
<https://www.s.u-tokyo.ac.jp/ja/story/newsletter/treasure/06.html>（最終確認 2015年1月13日12時35分）
東京大学地震研究所
<http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/>（最終確認 2015年1月13日12時36分）
「農業と環境 No.103」 2008年11月1日 独立行政法人農業環境技術研究所

A Study of Lively Volcanic Bullet

TAKAHASHI Naomi

Abstract

Lively volcanic bullet is one of Kenji Miyazawa's literacy works, which story appears a main character whose name is 'caw stone' who is a volcanic bullet. As for the piece, Kenji described and wrote his belief for *Lotus Sutra*, as well as his thought in those days.

Moreover the piece contains and investigates the history of Tohoku district and several local characteristic. Particularly, we can read an Iwate-mountain's mountain worship and the culture which believes in a megalith in Ezo form his work.

Key words: Volcanic bomb cow *Lotus Sutra* Ezo Fugyo- Bodhisattva Mountain worship